

「子どもの貧困」に向かう学習支援の取り組み（その2）

－「中学生勉強会」参加者による事業評価－

○ 新潟県立大学 小池 由佳 (2735)

小澤 薫 (新潟県立大学・8150)

キーワード：学習習慣の定着・貧困の連鎖・子育て支援

1. 研究目的

本研究は、「『子どもの貧困』に向かう学習支援の取り組み（その1）」（小澤、小池）の（その2）である。本研究の対象となる取り組みの概要及び目的は（その1）の内容を参照されたい。「子どもの貧困」に対する社会的関心がここ数年高まる中で、低所得世帯の中学生に対する学習支援という手法を用いて、貧困の連鎖を食い止めようとする動きが活発化してきた。現状では、数十年と活動が続いている団体もあれば、本研究のように、まだ手探りの状態で進めている団体もあるという多様な状態にある。いずれにしても、継続的な活動がこの取り組みの目的である貧困の連鎖を防ぐことにつながるといえる。

本研究は、そのような活動の一つであるA市B区で行っている「中学生勉強会」を当事者の視点から事業評価を分析、考察することを目的としている。事業が始まって初期の段階での評価や課題を当事者の視点から分析することで、継続的な活動を支え、効果的な事業の実施につなげていくこととしたい。

2. 研究の視点および方法

本研究は「中学生勉強会」に参加する当事者による事業評価である。具体的には、2011年度の「中学生勉強会」に参加した中学生及びその保護者を対象にアンケート調査を行った。中学生に対しては、年度末に行った交流会にて集合調査を行い、当日欠席者には郵送による配布、回収を行った。保護者に対しては、郵送調査を行った。回収率は中学生が66.7%、保護者が45.5%であった。

3. 倫理的配慮

本アンケートにあたっては、新潟県立大学倫理委員会の規定に従って手続きを行い、委員会の承認を得た。収集したデータについては統計的に処理を行い、結果の公表に関して個人が特定されることのないよう配慮している。上記のような配慮を行う旨を調査の目的・趣旨とともに調査票表紙に明記した。

4. 研究結果

中学生へのアンケート結果からは、「学習の満足度」が非常に高く（「90%以上」50.0%、

「80%」32.4%）、自宅と比較した学習への集中度も高くなっている（「集中できた」「やや集中できた」計 91.2%）。その結果、以前と比べて学習を楽しめるようになっており（「そう思う」「ややそう思う」計 76.5%）、自宅での学習時間にも変化が現れている（「変化あり」52.9%）。具体的な変化の内容として、「少しずつだけでも勉強するようになった」「できなかったところを復習してみた」といった回答が寄せられた。自宅での学習に対する変化については保護者アンケートの結果にも現れている。「帰宅してからその日の夜に毎回ではありませんが復習するようになりました」「自分で進んで勉強するようになった」という学習意欲の変化、「勉強会でこれをしよう」と計画を立てられるようになりました」「テスト勉強、宿題を計画的にするようになった」という学習への見通しの変化、「わからない単元がどこなのか自分で気がついたようです」という弱点への気づき等が寄せられた。中学生にとっては学習習慣の定着だけでなく、サポーターである大学生ときまざまな話ができてきていることも評価されている。これについても保護者から同様の声が寄せられた。

次に保護者にこの事業への参加理由を尋ねた結果、多くの方が子どもの学力についての不安を抱えながら、経済的な事情により、手を打つことができずにいたことが明らかになった。子どもを参加することでその変化を見ることができたため、事業への評価も高く、周りの人に勧めたいと感じている（「勧めたい」「やや勧めたい」が計 75.0%）。

5. 考察

参加した中学生、そして家庭から送り出している保護者のいずれにおいても、事業を好意的にとらえ、学習習慣の定着に貢献していると認識していることがわかった。但し、保護者については好意的にとらえている人たちが回答していきている可能性は高い。しかしながら、2010年度末に行った同調査より回収率（36.0%→45.5%）は高くなっており、事業そのものへの関心が高まっているといえる。

中学生にとっては学習習慣の定着だけでなく、大学生であるサポーターと関わることで、この勉強会の場が学校以外での居場所となっていることもわかった。

保護者について、子どもに学習の機会を提供したいと考えていてもそれが難しい状況に置かれていることが明らかになった。子どもが受験期を迎えても経済的な事情で塾に通わせることができない保護者にとって、この事業は子どもに学習の機会を提供できる大切な存在になっている。子どもの教育に関心があっても、経済的にそれが困難な家庭に対して支援を行うことで、その家庭における子育てを充実させることができるという点では、この中学生勉強会は「子育て支援」の一つといえるだろう。

今後の課題としては、中学生勉強会に登録したものの不参加となっている中学生たちが参加しない、できない理由を明らかにし、参加を妨げる要因をできるだけ取り除くことが挙げられる。